

*** 岡山天体物理観測所の観測原簿1号について**

昭和35年(1960年)10月19日、東京大学東京天文台岡山天体物理観測所というひどく長い名前の観測所の開所式があったとアーカイブ室新聞138号に書いた。望遠鏡調整を行いながら観測が行われていたのは当然ながら開所式以前からであった。今回、国立天文台天文情報センターから国立天文台ニュースの連載記事である「NAOJ 歴史観測隊が行く」の取材のため観測隊員の1人として岡山天体物理観測所を訪ねた。岡山天体物理観測所の任務は日本最大の188cm望遠鏡などで観測研究を行う傍ら、日本全国の天文学者に観測の場を提供することであり、1960年の観測開始から観測原簿が存在している。今回の取材を元に国立天文台ニュースの編集者が記事を書くが、筆者は岡山天体物理観測所2期生で1961年3月1日からこの観測所で働いていたこともあり、関係記事を先駆けて書いている。写真1、2が観測原簿のVol.1であり、1960年9月22日～1961年2月24日のものである。



写真1 観測原簿 Vol.1

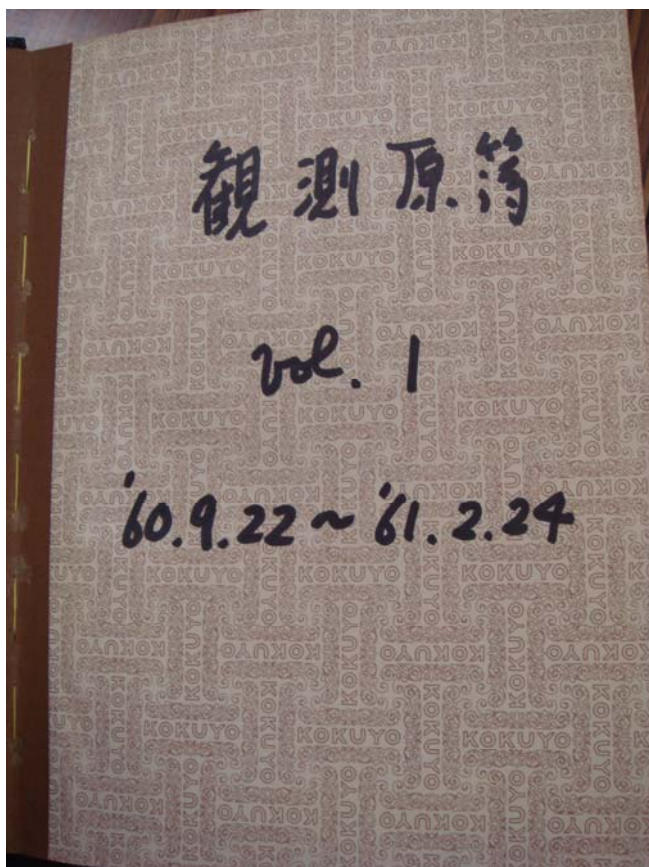


写真2 観測原簿の最初のページ

この観測原簿は、観測所が存在する限り観測所でアーカイブされるべきものであろう。観測原簿の記録第1ページが写真2である。観測者の名前のなかにイギリス人技師2人の

名前が見える。Wallis、Hall、末元、清水、石田の5人が観測者で、Hall氏は他の人より早く下山するため、運転手の中務氏が残っていたようであった。ちなみにこの運転手の中務氏が現地採用の第1号であった。

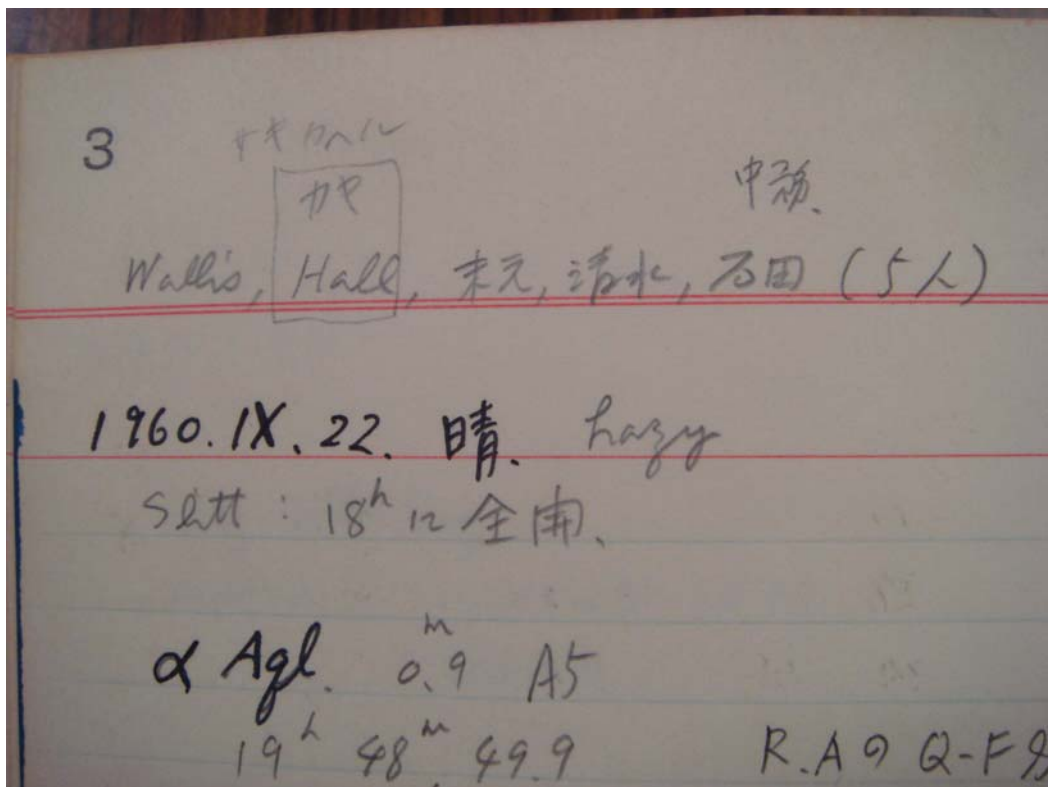


写真2 観測原簿 Vol.1 の記録第1ページ

このページによると、ドームスリットを開いたのは18時、最初の星は α Aql（アルタイル：鷲座のアルファ星、0.9等、タイプA5）だったようだ。

観測原簿 Vol.2 の3月10日のページにはすでに筆者の名前が登場する(写真2)。筆者はこの3月1日に岡山天体物理観測所に就職したばかりであった。

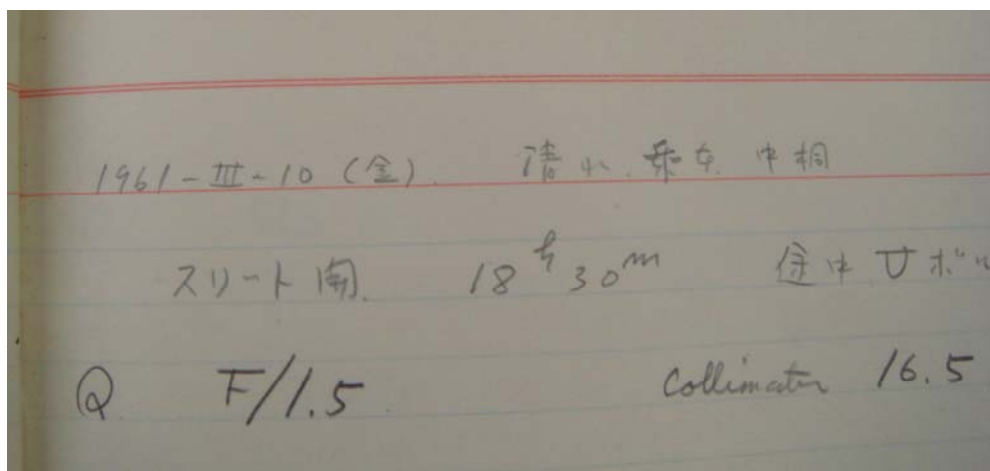


写真2 1961年3月10日の観測原簿

写真2のQ F/1.5というのは、アーカイブ室新聞138号で紹介した188cm望遠鏡といっしょに購入されたカセグレン分光器の水晶プリズムを使った分光器のF数の小さい方を使ったということで、この分光器は、現在は岡山天文博物館に展示されている。

写真3はVo1.2の192ページで1961年11月24日(金)の日付がある。この観測者の名前を見ていただく、藤田、古畑、大沢、清水、山下、渡辺、中桐とある。

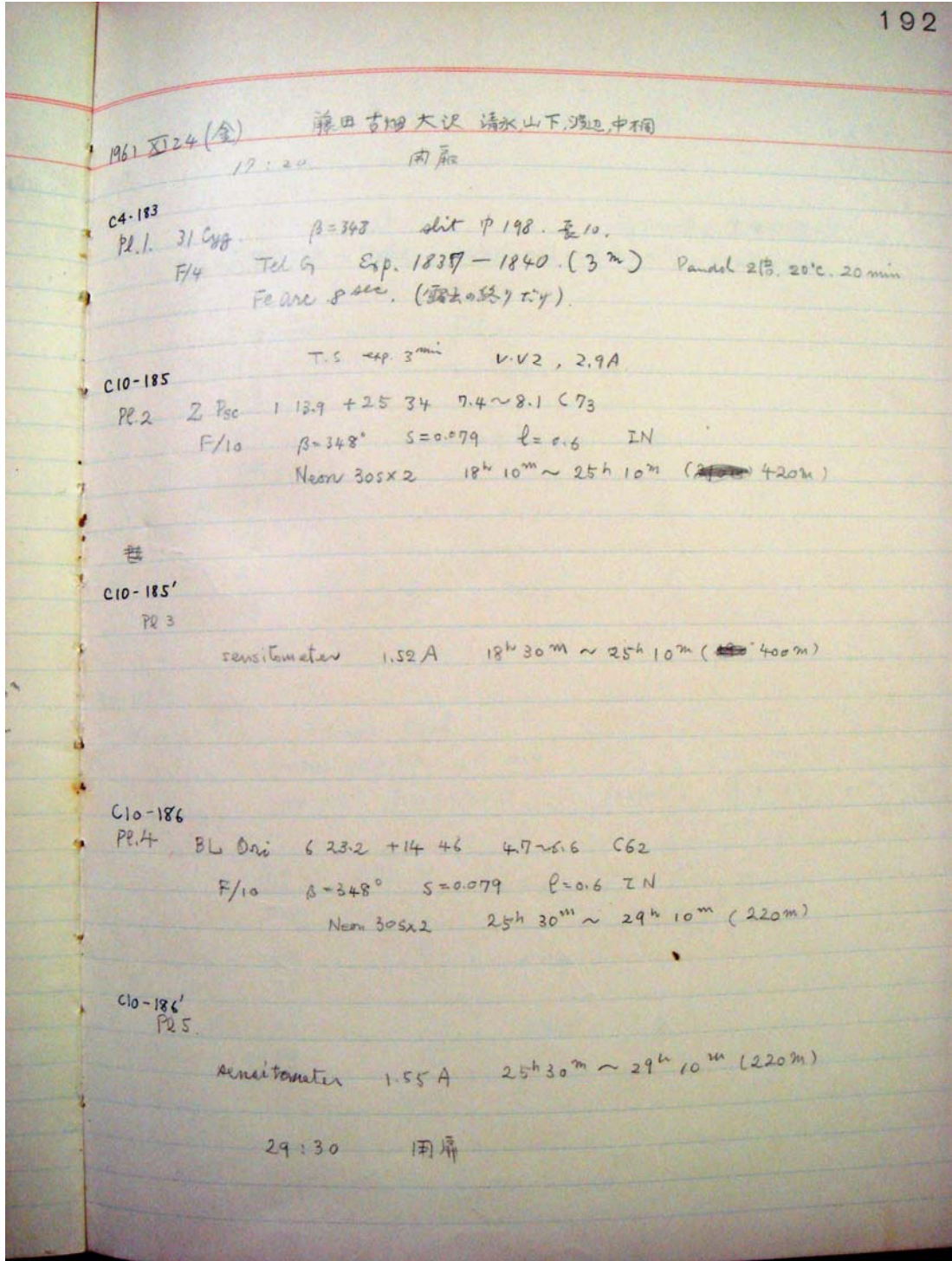


写真3 観測者として藤田、古畑、大沢、清水、山下の名前のあるページ

また、写真4の開所式から間もない昭和35年12月5日(月)のページには観測者として広瀬、大沢、石田、近藤の名前が見える。これらの名前をご存じない方にとっては感慨もないであろうが、筆者にとっては神々しささえ覚えるのである。

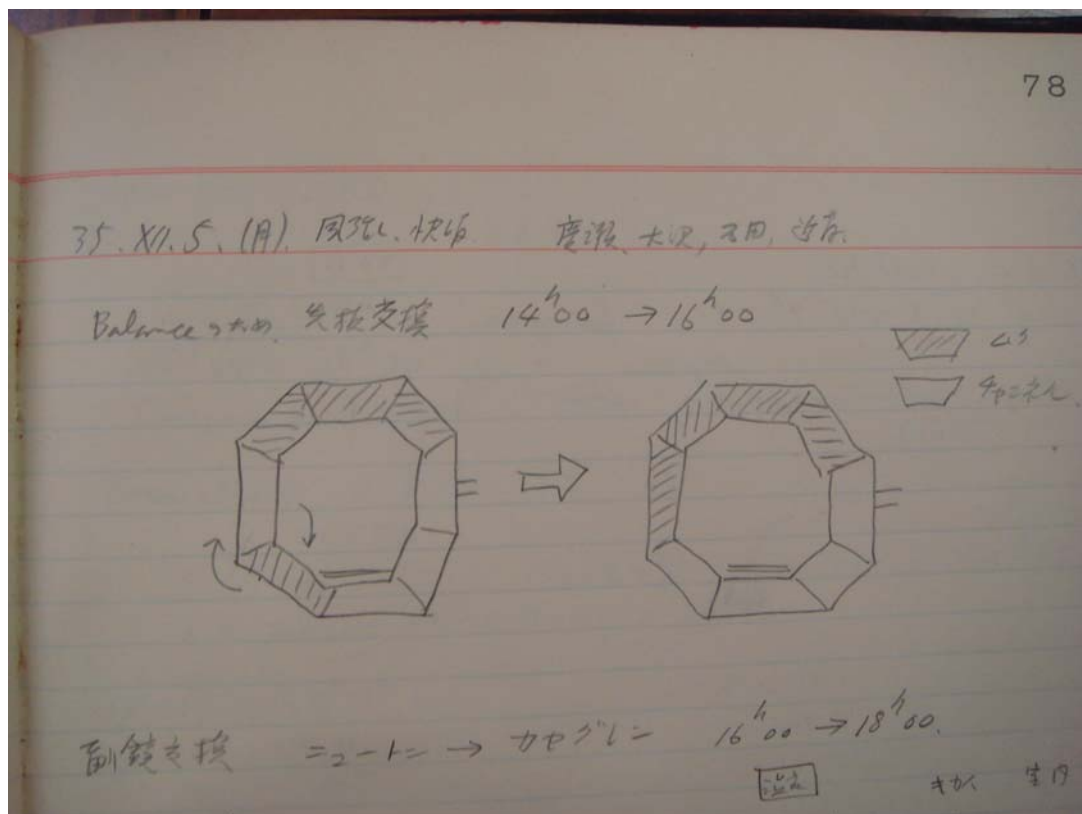


写真4 広瀬、大沢、石田、近藤の名前の見えるページ

写真4の記事を見ると、14時から16時にかけて望遠鏡の鏡筒のバランス調整のメモであり、16時から18時には副鏡をニュートン鏡からカセグレン鏡に交換した記録が記載されている。

このような原簿も、時代に沿ったデジタルデータとしてアーカイブする必要があるであろう。